

今回史学会大会で報告する機会をいただき「中世の武士をどう教えるか」という仮タイトルをつけさせていただいた。このような大それたテーマを設定した理由を説明して大会の準備報告とさせていただきます。

大学院を修了して現在の職場に来てから今年で七年目である。その間、私なりによりよい授業を作り上げるために試行錯誤してきた。グループ学習やその内容の発表などの形態を授業で取ることもあるが、やはり一斉授業として系統的に教えるという授業がほとんどであるというのが現状である。自然、私の授業準備も一斉授業の中で、いかにして生徒の興味をひき、歴史的思考力を育むことができるかという点に重点が置かれている。ところで、佐伯真人氏は知識注入型の授業改善点として、①生徒に疑問が生まれる授業 ②生徒の考えを揺さぶる授業 ③多角的に考えさせる授業の三点をあげる。この3点の中で、私の授業実践では①・②を常に意識している。一方で、木村茂光氏は「通史」学習の実践者である教員に問い直し、捉え直す」授業を求めているが、両者とも生徒が持っている歴史観や歴史像を再構築させる点では共通しているように思われる。特に高校の日本史の授業では、小学校・中学校と通史学習を行い、その他にも漫画やテレビで歴史に接してきた生徒たちは彼らなりの歴史観や歴史像を持っていることを意識する必要があると思う。教員と生徒の歴史観の隔たりがあることを意識するだけで授業改善につながることもある。

その中でも「武士」に対するイメージは特にその傾向が顕著であるように思え、授業を行う上で日常的にそれを意識している。近年の歴史学において、当該期の「武士」研究は職能論的武士論が主流となり、その中で武士英雄史観の克服を目指しているが、高校生にとっての武士像は、まさしくこの英雄史観的武士像かもしくは江戸時代の城下町を闊歩するお侍さんのような武士像の二つに分別できるといっても過言ではない。また、この高校生が持っているイメージは大河ドラマの「平清盛」に対する県の知事の発言を見ても広く社会に一般化されたものであるように感じる。それを踏まえ、生徒の考えを揺さぶり、疑問点が生じるような授業を展開したいという目標がある。

もちろん、一回の授業でそれが達成されるわけでもなく、大会で紹介する授業実践もそのごく一部であることは言うまでもない。ただ、現場の教員として現時点の到達点を示し、私自身の成長のためにも皆さんの貴重なご意見をご教示していただければ幸いであり、私のつたない報告が議論の端緒になればと考えている。

(参考文献)

佐伯真人「思考力・判断力・表現力」をつける授業づくりのポイント(土屋武志・下山忍編『日本史授業デザイン』2011年、明治図書)

木村茂光「通史」を書くことと教えること(『歴史評論』第734号、2011年)

島田 哲弥(しまだ・てつや)

二〇〇五年本学大学院修士課程修了。現在、国際学院高等学校教諭。